

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「SBSマイホームセンター杯 静岡県少年ソフトボール大会」事業

歴史あるソフトボール大会を活用して 障がい児や異世代と交流する場を創出

子どもたちの身体的、精神的育成を地域で育むことを目的として1991年から静岡県で続くソフトボール大会がある。この大会を障がいを持つ子どもと健常児の相互理解の場として、さらにシニア世代との異世代交流の場として活用することで、障がいの有無や年齢に関係のない共生社会の実現に向けた一歩とする試みが行われた。

静岡新聞に掲載されたイベントを告知する紙面

地域が一体となったソフトボール大会を 共生社会の実現に向けた事業に拡大

静岡県内の小学生を対象に、スポーツの振興と健全な育成を目的としたソフトボール大会が開かれている。2018年度で28回目を迎えた大会で、県下で開催されるソフトボール大会としては参加チーム数も多く、県内ナンバー1を決める大会として定着している。親子2代での大会参加者もいて、会場には祖父母も含めた幅広い世代が応援に駆け付ける。

ブロック大会は夏場に行われることから、選手たちの熱中症対策のため、飲料メーカーやドラッグストアの協力の下、飲料提供だけでなく、熱中症について学ぶブースや、保護者に対して子どもの体調管理や成長サポートなどの情

報を提供するブースを設けるなど、地域が一体となって子どもたちの育成に取り組んでいる大会でもある。

これまではあくまでもソフトボールを主軸とする大会として開催されていたが、実行委員会ではかねてから身体と心の両面を育成することが本来の健全育成であると考えていた。おりしも2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、障がいの有無を問わない共生社会の実現に注目が集まっていることから、大会に地元の障がい児のグループを招き、試合の応援に加わってもらうことで交流を図り、同じ社会の一員であるという認識を持ってもらうとともに、適切な関わり方を身につけることを2018年度の大会のテーマの一つに掲げた。

また、まだまだ元気なシニア世代の活躍の場を創出する

とともに、核家族化が進む現代で異世代交流を図るため、日本の伝統的な遊びである折り紙、お手玉、けん玉などをシニア世代と子どもたちが一緒に楽しめる交流ゾーンを設けることにした。

招待した障がい児に公式用具の贈呈と 昔遊びでシニア世代と異世代交流

2018年度の決勝大会は11月23日・24日に静岡県富士宮市山宮スポーツ公園で開催された。大会には富士宮市周辺の養護施設などに通う障がい児が10名招待され、開会式でバット、ボール、グラブの2セットが贈呈されたが、「これまでプラスチックのおもちゃのバットで遊んでいた。公式用具に触れるのは初めて」、「体を動かすのが好きなので、さっそくみんなでソフトボールをやりたい」と大喜びしていたという。

シニア世代と一緒に伝統的な遊びを体験するブースには、兄弟の試合の応援に来た子どもたちを中心に延べ500名



ソフトボール大会の開会式

ほどが参加。昔ながらの遊びは初めて体験するという子どもが多いなかで、何度も同じ列に並んでは繰り返し遊ぶ子ども、時間を忘れて熱中する子どもが多く見られ、特に輪投げは長蛇の列となるほど人気だったという。その様子を見た実行委員会では、逆に「今回のような祖父母世代との交流の機会や日本の伝統文化などに触れる機会を子どもたちに創出していかないと、古き良き文化が急激に廃れてしまう危機感を覚えた」と話す。

大会の様子は、翌日、地元紙の静岡新聞に記事として取り上げられたほか、12月中旬に採録紙面として掲載された。「これまでは、あくまでもソフトボール大会であり、身体を鍛える場を提供するイベントでしたが、今回、AJOSCから助成をいただいたことで、障がい児や異世代との交流を図ることができ、子どもたちの心の面を鍛える場を創出することができた。改めて共生社会について考えるきっかけにもなった」と、実行委員会では振り返っている。



養護施設などに通う子どもたちにソフトボールの用具を贈呈

助成団体:SBSマイホームセンター杯静岡県少年ソフトボール大会実行委員会



共生社会の実現に向けて改めて事業について考える契機に

今回の助成で実施した内容は、改めて我々の事業のあり方を考えるよいきっかけになりました。2020年に向けてパラアスリートへの注目が集まっていたり、ダイバーシティという言葉が定着しつつありますが、人々の多様なあり方を相互に認め合い、全員が社会参加できる世の中を実現するために、当団体としてできることを微力ながら頑張りたいと思います。

SBSマイホームセンター杯静岡県少年ソフトボール大会実行委員会
静岡新聞社東京支社営業部 北川晃昇さん